

1918年(大正7年)[23歳]

「樅の日記」(小池政美日記)(2)

——1918年11月23日～12月31日——

小池政美(編者 小池辰雄)

○1918年11月23日(新嘗祭)

〔筆者 小池政美23才、帝大英法科3年生〕

恵み深かりし旅の日を了えて東京に帰ってから既に12日になる。12日の間に世界は全然変わってしまった。新渡戸先生のお辞ことばを借りれば、(*)1918年11月11日午前5時を以てModern ageはNew age になってしまった。また同じ12日の間に、もうお顔を見ることの出来ない方が我等の身近に起こってしまった。大関先生〔当時地理学界の中堅、輝かしかるべき将来ありし学者、氣骨稜々りようりようたり、惜しみても余りある人なることを私は兄から聞かされた。〕は1918年11月14日午後2時北海道釧路で従容しょうようと死に就かれた。一は喜である、一は悲である。喜は世界の喜であり、悲は自分一人の悲にとどまる。しかし何れも大いなる出来事であった。忘れられぬ出来事である。……12日の怠慢は明瞭なる12日の怠慢としておきたと思う。なるべくはこんなブランク〔白紙〕はもう欲しくないものである。毎日毎日を規則正しく暮らして行けば日記をつける時間はあり相なものではないか。

〔*小池文庫編集者註：第一次世界大戦(1914/7/28～1918/11/11)、1918年11月11日午前6時、ドイツは連合国との休戦協定に調印。同日午前11時、発効〕。

……スケジュール[schedule 表、箇条書き]にまとめて見ると大いなる出来事は大関先生の御逝去と世界平和とである。注意すべき事は内村先生の講義である。三つの事は明白にかかねばならぬ。小さな事としては腫物のあとしまつ、桐法会〔高師附属中学出身者にして帝大法科を卒業したる者の会〕、ピクニックがある。

昨夜は晩おそかった、寝たのは2時であった。但しそのお陰で30頁の行政がすんだのであった。今日はまたまたそのお陰で目の覚めたのは8時すぎ。……おば様は御快諾下さった、空は本当に美しかった。水は昨夜の雨で大分汚れて居たけれども量は大かった。土の黒さと生き生きした大根の緑とが美しかった。小さな櫟林くぬぎもよかった。何も彼も実に美しかった。よき3時間の散歩をして帰る。

帰ると(○○)さんが来ていた。何となくふさぎ込むが故にやって来たと云って居た。僕の心は何故か普段の親切に帰る事が出来なかった。恐らくは思う程のHilarity〔陽気、愉快〕を得られずに○○さんは帰った事だろうと思う。少し気の毒なという気がする。気の毒と云えば○○さんは「スリー・ホームズ」「三家庭」と云う有名な家庭小説〕の中、マーチン・アラーバイ〔Martin Allerty〕が一番好きの様である。人間の眼には幸福に見えるかも知れぬ。



ただ僕はラルフ・ダグラス〔Ralph Douglas〕が好きである。試練を経て来ているという事も一因かも知れない。しかしその外にも何ものかが僕を引きつける。

〔ダグラスは男らしいまた情の深い少年であった。ラルフ兄弟(弟をクリスティー Christie と云う)の事を想うとき、私は言い難きものを感じる。良き小説は道徳書類の表し得ぬ美わしきあるものを与えてくれる。詩や小説はそれ自身真理を表現しているときに、聖書の最もよき註解の一つである〕

……ピクニック、15日に〔神田〕十拳君に会わなかったので16日にはピクニックなきものと考えて居た、ところが16日になると不意に行こうじやないかという事になる。その日は前夜の桐法会がたつて10時10分前に起床し、十拳君の「外交史」を返さんがために朝食をぬきにした日なので大いにまごつかざるを得なかったけれども、よき天気ではあり、正ちゃんを少しでも慰めたかったので、やつぱり相談合の上出かけることにきめる。正ちゃん都合もよかった。堤——大宮八幡——堀ノ内、あげまん——十拳君、おそぼ。もう武蔵野の秋は酣で、初冬は将に来ようとして居る。櫟の林は美しい。林の中で一枚撮つてくれたけれども、うまく写ったかしら。済美学校の中へも入って見た。よき池があった。星を仰ぎつつ、「……」に君の勉強は実に贅沢だと言いつつ帰る。翌日驚くべき速度を以て「注意した効があつたとお思ひになる日が近い内に来る様に致します」という手紙を得た。僕はこのいと早き手紙の Bedeutung〔意味〕を大ならしむる術を知らない。……

○1918年11月24日(日)

朝ルカ伝を読む。日本訳には、「主の言を信ぜし者は幸なり」とある。改訳には、「信ぜしものは幸なる哉」とある。英訳には、

“And blessed is she that believed.”

とある。ただ独逸訳だけは

“Und glückselig ist, die geglaubt hat ; denn es wird erfüllt werden, was ihr vom Herrn gesagt worden ist.”

「信ぜし者は幸福なるかな、主の語り給うことは必ず成就すべければなり」(ルカ1・45)

とある。僕にはルカ伝第1章45節は独逸訳が好いと思われる。〔この独逸訳はルーテル訳である。この訳は「信ぜし汝は幸なるかな……」と第二人称を用いている。エリザベスは

“Behold the housemaid of the Lord : be it unto me according to thy word.” (Luke, 1-38)

「視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく我になれかし」(ルカ1・38)

と言ひ得たマリヤを讃めたのである。心の正しき人は談の相手を讃めるのに一般化した讃辞を使わねばならぬ遠慮はいらない。思うがままに我が心を発露せしむるを以て足る。エ



リザベスには甲をほめんがために甲をほめ切れず「甲をほめ得ずと同義」、一般的甲をほむるに出すべき言を用うる程に他人の善に対する嫉みはなかった。彼は目の前の我が姪に心からの祝福の声をあげたのである。しかしこの詮索だては小事にとどまる。ルカ伝第1章45節は単純なる一行ではない。ルカ伝第1章の一部である。ルカ伝の一部である。ルカ伝第1章の意義は何、ルカ伝は何という所まで早く行かねばならない。もっともつと勉強しなければならぬ。

午、浅はか町〔浅嘉町のこと〕へ行く。つかれたと言いながら、お客の前で足を出した詫にである。或は僕の真意は軽くとられすぎたかも知れない。

青年会館へ廻る。腓利門書の続講である。前週の分とも、まとむべきき場所の様に思われるから果たしてうまく出来るかどうか判らぬが註解を試みて見る。

先生の議論は単なる腓利門書の講義ではない、聖書全部神言説の立場に於ける夫である。題そのものは大きくない、しかし言わねばならぬ事は多く、深い。

〔以下ノート12頁にわたって講義の内容が認められてある。これが内村先生のものであると云う立場からはここに載せるべきでない。しかし樞の日記の一部と云う見地、並びに言通りの筆記ではなく、筆者の気持が読み得る立場から、次号に載せるつもりである。〕

——星を学ぶは何のため——

中学2年の弟、

「大きい兄さん！ 星座がわかると何時頃だか時間がわかっていいのね」

大学2年の兄、

「だけれど、辰さん！ 時間を知るために星を学ぶのじゃないんだよ、……」

兄の言は余韻をのこして断れた。弟はその先を問い得なかった。

二人は夕闇を歩きながら話題を多分、一高対三高の野球戦にとりつつ家路を急いだ。

幾年か経て、弟がその先を知ったとき、兄は地には居なかった。

真理はしばしば説明されないのが最善の道であることを学んだ。（編者辰雄）

○1918年11月24日（つづき）

〔圏点は編者の付加したるもの「」符はすべて編者のもの〕

腓書〔ピレモン書〕は短い一書簡である。原文のギリシア語にすれば337文字（？）とかにすぎない。仮名混じりの日本訳にしても約一頁をうずむる字数である。25節より成る、繰り返すが単なる一書簡にすぎぬ。その内容はいえ、ローマ書の如き、コリント後書の如き、或いは人の救われるは義〔人の〕ために非ず、信仰に依るといい、或いは人の復活を説く壮美は無い。一見したところオネシモなる一奴隸をその不義をなして逃げ来れる旧主フィリーモンにポーロが侘状を書いているにすぎない。



この小なる事に関する短い書簡はその小と短との故を以て聖書一部神言論者にとっては聖書全部神言論者に対する非難の最もよき中心点であった。これが神の言であるか、これが聖書の中にある可き書であるか、これが果たしてポーロの書であるか。

誠に腓利がポーロの書なりや否やは大問題である。いわゆる高等批評家はいう、ポーロの名を以て呼ばるる書15冊を数うるけれども、確かにポーロの書を以て目すべきものはローマ書、コリント書、ガラテヤ書の4冊にとどまる。ピリピ書、エペソ書、コロサイ書は何れとも見られるが、まずポーロの書にあらずとするを妥当とする。ピレモン書は如何。ピレモン書、もしポーロの書となさばピリピ、コロサイ、エペソ、またポーロの書たらざるを得ないと。誠に腓利門は要であるので、これがポーロのものと認められれば、聖書の中のポーロの名を冠しつつ実に於てもポーロの書なるものの数は増すのである。

この故にポーロの書として腓利門を活かす可きか然らずして殺すべきかは激しくあらそわれた。涙を流して腓利門を殺した人はあった。エペソ、コロサイ、ピリピを殺して来た論理上の必要から腓利門を殺した学者も少なく無かった。

しかしながら、^{サバテイア}Sabbatar にはこの事は出来なかった。彼には流れ出づる涙にまぎらされて腓利門書を斬る不明なる良心と学識とはなかった。彼は断乎として腓利門書を助けた。そのポーロの書たる所以を弁護した。彼は腓利門を助けると同時にエペソ、ピリピ、コロサイ等も救ったのである。ポーロを活かしたのである。

「高等批評が」百歩を譲つてよし。ピレモンを以てポーロの書なりとするとも、いわゆる高等批評は何故にポーロのこの書簡を以て神の言となすやというであろう。誠にここには一見ローマ書、コリント書の偉大はない如くである。しかし果たしてそうであるか。

我等はピレモン書自身をして説明せしめようと欲する。

ポーロはローマに居る。今囚われの身であるそのクリストの囚人たるパウロという所に彼の篤い信仰と「この世ならぬ」幸福とがある。10節に於ても

「囚人となる我パウロ、^{なわめ}繯縄の中にて云々」

と云っているのを見てもローマなる牢獄、少なくとも監視されたる裡よりこの温かき手紙を書いている事は明らかである。手紙の受取手はコロサイなるピレモン、その妻アピア及びその息子アルキポである(ピレモン書1・1、コロサイ書4・17)。

「我らが愛する同労者、我らの愛する姉妹」

と云うを見れば、よき信仰の間柄であったのであろう。夫妻共にパウロに従い、息子も従い、その家に教会を開き得しを思えばピレモンは幸な男であったといわねばならない。ポーロもそう思う。その故に彼はいう、

“ 4 Ich danke meinem Gott und gedenke allezeit an dich in meinen Gebeten, 5 weil ich von deinem Glauben höre, denn du an den Herrn Jesus hast, und von deiner Liebe gegenüber allen Heiligen, ”



「⁴われ祈るとき常に汝をおぼえて我が神に感謝す。⁵これ主イエスと凡ての聖徒とに対する汝の愛と信仰とを聞きたればなり。」(ピレモン1・4～5)

「主イエスと凡ての聖徒とに対する汝の信仰と愛」

と云うのが難解とせられる。この故に詳言すれば「聖徒に対する信仰」と云うのが変であるが故に、理解し難きが故に、或いはこれをコロサイ書1・4の如くに、

“⁴ da wir gehört haben von eurem Glauben an Christus Jesus und von eurer Liebe zu allen Heiligen,”

「⁴これキリスト・イエスを信ずる汝らの信仰と、凡ての聖徒に対する汝らの愛とにつきて聞きたればなり。」(コロサイ1・4)

と解するものがある。なるほどコロサイ書とピレモン書とは恐らく同日同時間の中に書かれたものであるから両者中の似よった文句を同様に解せんとする一理なしとしない。しかしながら、コロサイ書はコロサイ人に一般に当てられ、ピレモン書はピレモンに当てらる。前者は動揺せんとする一地方に対する公の文であり、後者は友人親友に対する書簡である。両者の間にこれだけの差あるが故に両書に著わ^{あら}れて来る同様文字にも異なつた意味なしとする事は出来ない。殊に恐らくは同一時間の中に書かれたりとの一事は却つて両者の異なる意義を暗示するものと見る可きではないのであろうか。然らば聖徒に対する信仰とは何であるか。信仰の友に対する信仰とは何であるか。友だちとの干渉は愛情によつて成るがそれだけでは足りない。理解に於て堅くせられる。がなお不充分である。信仰によりて完成せられねばならないのである。君は君の友だちを愛し解すると同時に彼の中なる神を信仰せねばならない。自分の中の神を信じてくれる友人あらば何人の中傷者が表われ何年の誤解がわだかまらんとするともその友人との間は安全である。ピレモンには神に対すると共に友に対してこの信仰があつた。直接に神を瞻^{せんし}視すると同時に友人の中の彼を見得た。また曰く、

“⁶ damit deine Gemeinschaft in Hinblick auf den Glauben für Christus Jesus wirksam werde durch die Erkenntnis all des Guten, das in euch ist.”

「⁶願うところは、汝の信仰の交^{まじわり}際の活動^{はたらき}により、人々われらの中なる凡ての善き業を知りて、栄光をキリストに帰するに至らんことなり。」(ピレモン1・6)

即ち、

“⁶ That the communication of thy faith may become effectual by the acknowledging of every good thing which is in you in Christ Jesus.”

内なる信仰が外に表われて行為となる。行為の善なる部分^{こつと}を悉く神の栄光に帰し奉るによつて信仰はますます強くなるのである。ルッター「ルーテルの正しい発音」曰く、



「もし内に信仰の燃ゆるあらば必ず告白あらん。もし告白あらば必ずや十字架の患^{なや}みあらん。もし十字架の患^{なや}みあらば必ず栄冠の慰めあらん。信仰と告白と艱難とは相関関係にあり。」

「〔これらはよき基督者の責務なり〕」となお付加してある。——編者」

と。

内なる信仰よ、外に出でよ、外に出でて彼の御名を讃め奉れ。パウロはかく叫んだのである。誠にお前の事は思うだに愉快である、また慰めの本源である、と云う。

さて本題に這入^{はい}つて曰く、実はお前に頼みが一つある。外でもないオレシモの事である。お前がクリストを信じ凡ての善を彼に帰し奉る事を知るが故に、こうせよと命令する事も出来ると思うけれども、命令よりはお前の愛の心に訴えたいと思う。外でもないオレシモの事である。オレシモは我がローマの縲^{なわめ}縄中に得た子供達の一人である。さきにはお前に対してはオネシモはその名にそむいて「益なき者」であつたが今は正に反対である。お前にも益ある者となつたが自分にも益ある者である。今彼を帰す。請う、受けよ、彼はわが友である。我が信仰の友である。否、我が心である。思え、パウロはダマスコに育ちたりと雖も彼はローマ市民である。オネシモは如何。オネシモ、クリストの御名を称うと雖も、そのローマ帝国に於ける身分は一介の奴隷にすぎない。その頭をかかえてオネシモはわが心なりと云うパウロの心を思え。しかもそれがすぐ前にはコロサイ書に於てクリスト万有中心論を称え、

「¹⁵彼は見得べからざる神の像^{かたち}にして、万の造^よられし物の先に生れ給える者なり。¹⁶万の物は彼によりて造らる、天に在るもの、地に在るもの、見ゆるもの、

見えぬもの、或は位、あるいは支配、あるいは政治、あるいは権威、みな彼

によりて造られ、彼のために造られたればなり。」(コロサイ1・15～16)

と云いし同じ人の同じ時の口により、オネシモは我が心なりと云う言の出でしを思う時、パウロの人格は我が前に明白に表われて来るのである。温かき心よ、温かき心よ。

コレリツジは、

「余に於ては一人の小兒と雖もまた大いに一個の宇宙である」

と云った。アマスト大学のシーリー先生は内村先生のために祈られた。一つの宇宙、彼のために作られ、彼の手によりて作られしを思う時、彼のため彼の手によりて作られし自分も全く同じ心同じ情とならざるを得ない。本当の自由といい平等というはここに於て得られ達せられ得べきものである。

パウロはいう。彼は我が心である。我が所に留めておいて汝の代わりとして一緒に働いて貰いたく思う。けれども事後承諾はいやである。心から承知して貰った後でなければ自分の下で働いて貰い得ない。お前の下に居たたまれぬ彼を自分が許すのはお前に不信な行為になる。遠いけれども一度はオネシモはお前の下に帰す。



ローマよりコロサイまでおそらくは三十日余の旅路であろう。一本の手紙を以てオネシモの後悔せる事、改悛せる事を知らさばパウロはそのままオネシモを使っているといいうかも知れない。しかしそうではない。義理堅きは尊ぶべきパウロの心である。友情というものは礼儀と矛盾しない。正当な手続きを離れては善悪に限らず意思は徹らぬ。尊き友情のためには、よし一年の旅行と雖もさせねばならない。

高等学校入学という事実を以て過去は過去と葬るわけには行かない。一年の失敗、二年の失敗は一年二年共にそれぞれ決着を嚴格につけてから三年目の受験にかからねばならない。

パウロの心は堅かった。ある人がこの夜のオネシモとパウロとの問答が記録せられざるをうらむと云った。誠にその通りである。或はオネシモは面倒すぎる馬鹿丁寧だという声を聞いたかも知れない。面目ない旧主に会わせるだけは許して下さいと頼んだかも知れない。パウロは諄々と説いてどうしても行つて来ねばならぬ所以を釈明したことであろう。

しかしながら、パウロには単にオネシモにのみ心をとめて他を顧みないのではなかった。ピレモンに対してもまた彼の真情と雄弁とを以て迫る彼は言う。

なるほどオネシモはお前の許を逃げ出してローマへ来たのであつた。しかしローマに於て彼は神の御声を聞いたのである。神はその御声をオネシモに聞かしめ給わんがためにオネシモをお前の許より取り給うたのではなからうか。お前のもとより奴隷としての彼をとり去り給い、心霊上自由なる彼をまたお前に与え給わんと計画されたのではなかったのだろうか。誠に主の御声をありのままに聞くものは即ち最も自由な者である。誰が自由を有するともこれより自由なるものはない。自己の意思に於て自己に制限を加え得るこれを自由というとはカントの自由に関する意見である。身心の輕薄なる放姿等を自由というに比すればカントの見解遙かに大胆且つ雄なりと雖も、直接に神を聞き得る者、これを自由というは遙かにその上の信仰を含んでいる。何人をもしてこの意義に於て自由たらしめ給え。

今やオネシモはこの自由を享け得たのである。奴隷の心は彼にない。彼の心は兄弟の心である。その心を得しむるために神は彼にこの悲しき旅をせしめ給いしものである。自分は特に彼を愛する。お前も社会上彼の主人たる身分に於ても、また信仰上同じ神の御名を讃美すると云う意味から云つても彼を充分愛する事であろう。もし私を友として待つてくれるならば、同じ心、同じ態度を以て彼に対してくれ。

もし不義理なことをしてお前に迷惑を懸けているならば、それは唯にポーロ、この部分自ら書くポーロの負債としてくれ。

お前だからいうが、お前は自分に対して比ぶべからざる恩を蒙っているものではなからうか。だが、まあそんな事は言わない。願う所はクリストの御名に於て自分が慰めて貰いたい事である。しかしそれは安心している。お前はきつと自分がたのんだ以上をしてくれる事であろう。

それから自分のために泊まりの用意を頼みたい。お前達の祈りの聞かれて訪問す可き日の近づくのを覚える。訪問の暁には恐らくは我等の愛する兄弟オネシモの健全なるを見る事が出来るのであろう。

友情に訴え、理に訴え、義理に訴うパウロにはオネシモのために彼の全力をつくしまたピレモンのために彼の全注意を払って居る。一人の人間が既に宇宙ならば二人の人間の関係は大いなる二つの宇宙の関係である。自己に近き二個の宇宙が正に衝突したるを見てパウロは黙する事を得なかつたのである。彼の心は親切と礼儀とに満ちたのである。

最後にイエス・キリストの恵み汝らの霊と共にあらんことを祈る。物的に不足なき人のために祈るべきは霊のめぐまることであらねばならぬ。短しと雖もこれが腓利門書である。

ここに贖罪論なく、宇宙論なく、死生論なく、信仰論なしと雖も、ここに友情と愛すべき自由と憐憫^{あわれみ}がある。偉大なるパウロにはこの二方面が必要であつたのである。誰かこれをパウロの書としての存在を疑うものがあるか。また誰かこれが聖書より抹殺す可きものと認むるものがあるうか。

誠にルッターは言った、我等は神のオネシモであると。神のオネシモ、神のオネシモ、主の許を不義を以て逃れたる我等に対して斡旋の労と親切とをとらるるものは我が主クリストである。

神のオネシモよ、神のオネシモよ、喜びと希望とを以てフィリーモン^{もと}の下に行かん哉。

○1918年11月30日（土）

学校へ行つて見ると財政も外交史もお休みであつた。西片町へ行つて見たが正ちゃんはまだ帰らないので植物園を十拳君と一緒に散歩する。久し振りで歩むこの域は慕わしい思い出を多く蔵する。千駄ヶ谷に居た頃、青木へ遊びに来て此処へも来た事や仮林（？）の事や、土龍の事や、思えば皆十年から五年前へかけての事である。高等学校へ来てからは或いは今日が最初かも知れない。そうそう附属〔中学〕を出た時来た事を覚えている。高い天を名も知れぬ樹木の梢に仰いでお弁当を開く。△△先生の噂などしきりに出る。○○先生からのお話を十拳君が伝えて呉れたのであるが、○○先生が学生時代に見られたところに依れば、当時○○先生の下級に居られた△△先生は大変過激な思想の人で、社会主義になりはしないかと思われた相である。しかし誰にも意外な事には今の先生の憲法論がどういう訳か出来上がったのである。そしてなお不思議な事には△△先生の言行にはどうも是があの憲法論の著者の言行かと思われる節がある。何時までこの態度を続けてゆき得るか、△△先生の学者的良心を奇妙に思う、と云う様な意見であつた相である。

こういう話を聞くと、いつか何とか会で△△先生が酔われた揚句、△△が馬鹿になつて居るから諸君も呑気にして居られるんだぞ、と云われたと云う話など思い出されて、何と

なく辻褄が合う様な気がする。お気の毒なと云う様な気もするが同時に思うがままに振るまわれたらと云う遺憾もある。

12時少し過ぎ、西片町へ行き、今日は玉川の彼岸を歩こうと云う事になる。下布田の地図を忘れていたので大いに弱る。長い静かな道を歩きに歩いて調布の手前の北浦の停留場へ着いた頃にはすっかり秋の日は暮れ果てて星が美しく輝いて居た。登戸の渡しに立って暮れ富士と静かな流れを見た時もよかったが、低い森に地平線を限られた畑の中でこの幾万の天なる星を眺めた時は更によかった。

戸隠の夜、沼津の夜、武蔵野の夜、何れも静寂の大いなる胸を見せて呉れた。

今夜は同室会が豊国であったのであるが、僕はなしなけの金の中から肉を食うために三円を出す事が惜しかったので欠席にする。その代りにこの前の土曜に訪問しようと思つてしそこなつた岩瀬(信仰の友、兄より半年後、同じ病に斃れて、聖国へ行かれた。臨終にて「小池君のところへ行く」と云われた由。親切な人であった。兄の訃報が北京から来る二、三日前、心配して僕を訪ねて慰めて下さつたのも彼であった。)を問おうとした所が、多摩川から帰つて来ると、クリスマスの用意は出来上がったが、今晚教会覚醒の若き会があるから来ないかと云う葉書が来ている。又あの教会の他の人等と関係の出来る事をおそれて、電話で断る。断りの電話のために武田へ上がったのは8時であった。何となくうら寒い夜であった。お湯上がりの御身体を2時間をおば様は僕のために割いて下さつた。二階の日本間の座敷に座して静かにお話を伺うと僕ひそかの心も隠ひそかにおさまる。若しおば様が僕をあんかの如く心得らるるなら、おば様は僕のためには一杯のソーダ水たるを失わない。まあそんな諷談はやめにしてとにかくあのお座敷でお話を伺うことが出来たのはよき土曜の晩として、相応しき最後の2時間であつた。僕は或はと用意して行つた日記を出して今月の10日、11日頃の旅行の終りの部分の日記を読む。聞いていただいたので始めてこの間中からの積任が果たされた様に思われた。ほんとうに11月はよき月であつた。一春一夏の収穫時であると同時に来る可き冬の準備期であつた。よき努力の春と夏とを持ち得たと同時に、よき秋を恵まれた事を忘れる事は出来ない。わけてもおば様にはお世話になつた。お礼をよく申して帰る。

○1918年12月1日(日)

幾年以前の今夜は——たしか一高2年の冬の様に思われる——僕が和協楽堂で救世軍の士官候補生××氏にとつつかまつて、「押し売り式であつたのだろう」よぎなく救世軍を斥け、彼をして不快の面持ちをなさしめた日であつた。その時僕は聖心女子学院の荘厳なるマス(集まり)を見せられた後であつたので、僕の是認すべきは「むしろ」救世軍たるを得なかつた、「が」今はそういう只一面の言わばクリストと一面識の關係に於てでなく、救世軍を見捨てれば見捨てて居る程、彼御自身に近づこうとして居る身である。顧みて知らぬ中に歩んで来た路を感謝する念に打たれざるを得ない。



今朝は□□さんの弥生町から曙町への引越しを手伝う。大変な荷物であった。まあ八分まで片づいてお昼のお膳につき得たのは1時頃であったか。□□さんは□□さんの感激があつたらしく、しきりに新たな生活に御恵慈からん事を祈っていた。戸隠の8週間、戸隠を去らんとした時のその前夜の心地を思い出すことしきりであった「兄自身のこと」。

錦町へ廻る。「――以下内村先生の御講演を聴いて」

今日はアモス書中、第1章、第2章の研究であった。

アモスはテコアの牧者である。彼は富者に非ず、権者に非ず、又羊の所有者に非ずして、羊を牧^かう者の一人であつた。アモス自身も言う、

「¹⁴アモス^{こた}対えてアマジャに言いけるは、我は預言者に非ず、また預言者の子にも非ず、我は牧者なり、桑の樹を作る者なりと。¹⁵然るにエホバ羊に従う所より我を取り往きて我民イスラエルに預言せよとエホバわれに宣^{のたま}えり」(アモス7・14、15)

と。この一野人は単に信仰あるの故を以て、神命なるの一事を以てテコアを出でて王の聖所王の宮なるエルサレムに行き大胆に智^{ちえ}と侈^{おごり}とを以て奢^{おご}る其処の市民、官吏、王に呼ばわつて言う。

「³エホバかく言いたもう。ダマスコは三の罪あり、四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ。即ち彼らは……」(アモス1・3、5)

ダマスコの関は天下の要害である。今日のジブロータルの如きものか。若し、ジブロータルは陥^おつべし、と云うとき世の人は信ずるであろうか。アモスは正に之を喝破したのであつた。ダマスコの次にガザを責め、ツロを責め、エドムを責め、アンモンを責め、モアブを責め、ユダを責めた。エルサレムの四方の国々は悉く責められ、悉く歴史的事実を以て、神の智と力とによる罪に対する罰なりとした。エルサレムの市民嘸^{さぞ}や快哉を叫び、アモス万歳を称^{たた}えたであろう。しかしながら、アモスが羊の群と別れてエルサレムへ来た所以のものは、決してアモス万歳を呼^{さけ}ばれ、エルサレム万歳を称えしめんがためでは無かつた。彼の来たのはエルサレムそのものを責めんためであつた。この故に彼は言う、我が来たりしは、エルサレムよ、汝をして汝の仇敵の倒壊に快哉を呼ばしめんがためでは無い。ダマスコを亡ぼし、ツロを破り、最後にユダヤを責め給いし神はまたエルサレムを責めざるを得ないのであるぞ。エルサレムに多くの罪なしとする事を得るか。更に大なる罪を犯しし事なきか。汝等は義者を金のために売り、貧者を鞋一足のために売らなかつたか、弱者と見れば、その頭の塵一本さえも、貪^{むさぼ}らんとするは汝らではないか。柔和な者を苦しむるは汝の所業ではないか。父子二人、一人の女の許へ通うは誰であるか。質物を押領し、罰金を私消して神前に宴をなすは誰であるか(アモス2・6、8)。

若しダマスコ、ツロ、アンモン、エドムが神に亡ぼされし事を是認するならば、この次は汝等の番であるぞ。汝らは我が力を疑うか。高きアモリ人を亡ぼし(2・9)、また弱き



汝等をかつてエジプトより助けおこせし我が力を忘れたのであるか(2・10)、私は汝らを必ず亡ぼす(2・11、16)とエホバは言い給うのである。

我らは英仏を破れり、唯英仏吾等に服するのみといひし独^{ドイツ}乙人黙せよ。独乙にも英国にも仏国にも米国にも日本にも国家的罪悪はある。国家的刑罰来らざるを得ない。

123年以前、1795年終にポーランドを分割し終りし露(ロシア)、奥(オーストリア)、普(プロイセン)が今日に至つて敵味方に分かれて戦ひ、攻守5年、欧州の三大国、世界の三大帝王国と人にも許され、自らも赦したものが、悉く忽^{たちま}ちにして倒れ去つたことを思え。英国汝に三つ罪あり、四つの罪なきや、米^{けい}国汝になきや、日本汝になきや。我らは卿等を、殊に日本を愛するが故にこの心配なきを得ない。どうしたらよいのであるか。アモス書9章末段は之を語る。(以上)

「地人論」を買い、□□さん二人で紅茶を飲み、クリスマスには□□さんはガブリエル・マックスの「クライスト」を僕に、僕は感想十年を□□さんに贈る可き事を約して、数歩の後別れる。よき日曜日であつた。

○1918年12月6日(金)

午前中、附属にて追悼会通知(大関先生の)の表記書に忙殺、午後図書館にて会社法勉強。

○先生へ電話をかけたけれどもお留守。夜青木にて。お出来(フルンケルのこと)漸^{ようや}く万幕終了。

○が少ししよげていた事を気の毒に思う。コレリツヂの言う通り、一人の人の問題は僕には一つの宇宙問題になつて来た。一生懸命考えるけれども、どうも手段のつかないのに困る。

○1918年12月7日(土)

朝急いで武田へ、「S」先生への電話をさしあげるつもりで行く。……

9時に「財政」終る。正ちゃんに会おうとして行くと、今日は御△事がある事を忘れて、お約束をしてすまなかつたという断り。

十拳君と新宿から井ノ頭まで歩く。カントを読まねばならぬ。善悪に余程迷つていられるよう。出来ることなら何とかしてあげたいけれども、二人とも思うのであるが、問題は末に走^はせすぎているらしい。

夜は美しい星であつた。

○1918年12月8日(日)

好き日曜であつた。クリスマスに近づきつつある今日として、誠に好き日であつた。一日清き思ひの益々清からざるべからざるを思ひしめられた主の聖日であつた。



朝快く覚める。光久さんの筑紫の極はてまでの御土産にと神田明神まで納豆をとりに行く。午前は思ひもつかぬ間に溜まっていた過去一週間の日記をつけ、入浴する。額の腫物は凡て全快に近い。

一時本所の〇〇〇〇製造株式会社へ行く。〇〇〇〇と△△△△△△との合併契約及びこれがための総会のためにである。僕は消滅合併でなく有続合併と伺っていたから合併後の資本金は△△△△△△円と思っていた。すっかり思い込んでいた丈に△△△△△△円は△△△△△△円の半額払込の株によつて出来るのであると聞いた時には驚いた。僕の知らぬ事情もあるのであろうけれども、僕は終身△△△△にはなりたくない。愉快の少ない仕事である。……………すぐ美土代町へ行く。

今日はクリスマス準備講演、イエスの系図。馬太^{マタイ}伝第1章、路加^{ルカ}第3章の研究であつた。

(1) イエス・キリストの系図と唱うるものに二つある。一はマタイ伝第1章で、他はルカ伝第3章である。二つを比ぶるときに、単にその順序が異なるのみでなく人名にも差がある。二つの系図は二つのものでなくてはならぬ。近來の定説はマタイ伝はヨセフの系図であり、ルカ伝はマリヤの系図であるという事になる。

(2) イエスを生みし母のマリヤなることは疑う可くもない。マタイ之を伝え、ルカ之を伝う。マリヤが処女であつたこと、これまた信者として聖書全部神言説を採るもの、かくあらねばならぬとなす重大なる事実の一つである。然るにかかわらず何が故にイエス・キリストの系図を蹟するマタイ伝一章はその15節にヨセフを入れるか、これ大いなる問題であり疑問である。疑問であると同時にこれがまたクリスト教の一つの鍵である。クリスト教は単一なる個人の頭腦裏に生まれた冥想ではない。これは歴史を大いなるファクターとしてその背後に持つ。神がアブラハムとダビデとに大いなる約束をなし給ひし以上、必ずその約束を成就せしむる者はアブラハム、ダビデの後裔こうえいより出でねばならない。単なる被造物とは異ならねばならない。

(3) 日本訳のアブラハムの裔すえなるダビデの裔イエスは、独逸訳の、

Dies ist das Buch von der Geburt Jesu Christi, der da ist ein Sohn Davids, des Sohnes Abrahams.

と共に悪い。アブラハムの裔なるイエス、ダビデの裔なるイエスである可きである。改訳のアブラハムの裔、ダビデの裔イエスといい、英訳の

The Book of generation of Jesus Christ, the sun of Davd, the sun of Abraham.

と云うはやや稍正確に近い。

(4) 畜すえは子である。親の性質をうけたるものである。親に対する神の約を履する可きものである。ダビデがアブラハムに対する神約の実現者ではないのである。アブラハムとダビデとに約し給える大いなる約束の実現者はイエスであるのである。創世記12章、撒母耳



後書7章の神約の実現者はアブラハムの裔でもあり、ダビデの裔でもなければならぬ。かくの如きイエスの系図である。

(5) 系図とは何であるか。日本訳改訳ラゲ訳、皆、系図という、英訳は The Book of generation という、独訳は Dies ist das Buch von der Geburt Jesu Christi という。ラテン訳は Liber generationis Jesu Christi, (filii Davidis, filii Abrahami) である。新約の創世記である。新約の創世記は二義を含む、一は系図である(14節まで)。二は誕生記である(3章まで)。

三は一代記(マタイ伝全体)である。三義とも同時に含まれているのである。

(6) タマル。ラハブ。ルツ。ウリヤの妻。

(7) アブラハム・ダビデ、ダビデ・バビロン、バビロン・ヨセフ。一は庶民期である。二は国王期である。三は貧民期である。国王期にソロモンは出でたけれども、イエスは生まれなかった。三は天の数。七の二倍。

(8) 神の恵みの深く深く段々各の人を通して各の家が恵まれ、段々世は聖化すると最後の一段は神の御手を必ず要する。イエスはヨセフまで歴代信仰の家に生まれた事はヨセフの先祖の名は「ヨ」のつきしもの多きにより知る事が出来るが、それだけでは救世の人を生むことは出来なかった。最後には神の独子イエスを処女マリアを通して歴史的に吾等の中に住まわし給うた。エホバがアブラハムに、

「爰にエホバ、アブラムに言いたまいけるは汝の国を出で汝の親族に別れ汝の父の家を離れて我が汝に示さん其地に至れ。²我汝を大なる国民と成し汝を祝み汝の名を大いならしめん。汝は祉福の基となるべし。³我は汝を祝する者を祝し汝を誑う者を誑わん。天下の諸の宗族汝によりて祝福を獲んと」

(創世記12・1～3)

と約し給いしその成功のためには最後にキリストの初臨を要したのである。

エホバがダビデに、

「……エホバ汝に告ぐエホバ汝のために家をたてん。¹²汝の日の満ちて汝が汝の父祖等と共に寝らん時に我汝の身より出る汝の種子を汝の後にたてて其国を堅うせん。¹³彼わが名のために家を建てん、我永く其国の位を堅うせん。¹⁴我はかれの父となり彼はわが子となるべし。彼もし迷わば我人の杖と人の子の鞭を以て之を懲さん。¹⁵されど我の恩恵はわが汝のまえより除きしサウルより離れたるごとくに彼よりは離れることあらじ。¹⁶汝の家と汝の国は汝のまえに永く保つべし。汝の位は永く堅うせらるべし。」(サムエル後7・11～16)

と約し給いし事の成就のためには、彼の再臨を要す可きである。クリスマス祝う事はまた再臨を希う心であらねばならぬ。

(9) 我等もベイビー・クリスマス(Baby Xmas)を去つて大人の生誕節を迎えん哉。また、



小児のクリストを可愛い赤さん視するを去りなん哉。——以上
早くガブリエル・マックスが欲しい。

.....

Hにあつたので〇〇の事をたしかめると驚いたことには全然無根であつた。
夜、本郷まで母様と辰さんと三人で散歩をする。

出久さん退寮。

○1918年12月9日(月)

寒い日であつた。朝学校へ行く道も寒く、時間と時間との間は葉づたいの風を受けるのも寒く、帰り途も寒くあつた。殊に風に吹かれて大路を歩いて後の気持は又別である。

.....

法理は益々愉快になる。Neukantianer〔新カント派〕に入る。Rückkehr zu Kant!〔カントに帰れ!〕という何となく慕わしい名を、命題をまた聞いた。牧野先生に伺つてから既に2年はたつていた。

麻布の帰りに九段下で Bergson : Introduction to metaphysics〔ベルグソン著「哲学入門」〕を捜す。それはなかったけれども、独逸訳を買う事が出来た。昨日の Andersen : Improvisator〔即興詩人〕と言ひ、今日の“Einführung in die Metaphysik”〔哲学入門〕と云ふ本を侶とし、本を愛する者にとつては嬉しき事ばかりである。

武田による。6時から8時まで、おば様からお話を伺う。夜、石坂先生の雄筆に接する。

○1918年12月10日(火)

今日も寒い、外が寒いと内は馬鹿に火を燃^たくので図書館はたまらなく苦しい。教室は煙草の不潔で一杯である。外の寒さの方がどんなに快いか判りやしない。

朝9時45分、Kさんを東京駅に送る。……御機嫌よう、お大切に。……

法窓夜話を一寸のぞく。グローチウス夫人、オースティン夫人の話に感心する。しかも彼等の信仰に一目をも与えぬH先生、O先生の心理を不思議に思う。

ねむい午後を3時間教室に暮らし、公孫樹^{いちようじう}の梢に七日の月と夕暮の美しい色とを望みつづ本郷を後にする。学生の生活も段々暮れて行く。今の間今と云う声を聞く。いつもでも超塵越俗であらねばならない。〔アーメン〕

夜また、石坂先生の雄渾な文章に接する。日本民法中巻終る。明日は下巻八百頁を読まん哉。Improvisatorも楽しみ。Mill on the Floss の面白さ。Paulsen(パウルゼン)と Bergson(ベルグソン)とが机の一隅にある。今正に秋^{あき}なるを覚ゆる。



○1918年12月11日(水)

霰、雪、霽。朝が段々寒くなると不信仰に帰る、何とかせねばならない。今のままでは普通の人と何等の異^{ちが}いもない。しつかりせねばならない。詩篇第1篇は何を教うる。僕は所謂世の志操堅固者を何と考える、本当にしつかりしなければならぬ。今週も半はすぎた、もうあと2日を余すのみではあるけれども、その2日を美しく暮らしたい。

朝附属へ行く。「○○」さんと今度の高等学校令についてである。「○○」先生は「○○」さんを大褒^ほ賞めて居られた。高等学校問題については何も彼も大体僕の考えと同一であった。固^{もと}より本当の高等学校の生活の尊き所以から説き起こして年齢との関係に及ぶ事などは先生のお考えの中にはなかったし、また今年一高に入れる事は難しいが来年は大丈夫というようなさし当たりの細かい区別観は僕にはなかった。要するに単に高等学校(二高とは云わない)に入るという事だけからいうならば、今年でも好いけれども、高等学校へ入つてからの学問健康の事、特に高等学校の高等学校たる所以を解せんためには、ここ一年は静かに延ばすと云うは必要であり、よき事であるという事になる。

お昼に龍ちゃんから葉書が来る。こんどの日曜は午前の中は家にいるから早く帰つていらつしゃい、嬉しい話もあると書く。よき青年を弟として嬉しい事である。恩賜^{おんし}の時計は僕に於てはそう尊いものではない。……僕にはもつともつと望む高きものがある。昔グリークでさえ詩人にはオリンピアの賞はなかった。僕等何を真理のために、真理の外の賞を望もう。ただ龍ちゃんの真面目が軽薄才子の小細工を破りつつ行くを嬉しと思ひ、励ましたいと思う。

雪を踏んで本郷へ行く。黄孫樹^{いちよう}は外の木には見られぬ温味のある梢に白^{はく}を載せて美しい。政治学の教室は何時になく落ち着いて、よき2時間の講義を伺う事が出来た。題は「国家存在の理由」である。説明はいささかあき足らぬ所なしとしない。ただOrigin of Species(種の起源)を読む可き時の与えられん事を願うのみ。

図書館で高等学校令を調べ、疑とすべき点二、三を認め、文部省の真意とする所を解し得ず、浅墓町(浅嘉町)へ向かう。要之(これをようするに)、僕は高等学校という所は凡ての古き習慣、因習、権威をそのままには解することをなさず、新たに自身に自身と考え行く尊き時代であり、必要な時代であり、大学生のよき者が高商等の学生と比し得ざる所以の原因であり、そのためには中学4年で行く事の不利なる所以を説明した。……………

真面目に神よりの力を神のために使いたいというなら二部の方が好くはないかと思われる。二部の中、工部と農科^{いず}と何れを選ぶ可きか。僕自身なら農科を選びたくある。……

帰るにのぞんで、来週の日曜に感謝祭をしたいと思ひます、どうぞこの頃を有難いと思はれる方はお知らせ致しますからおいでくださいという。……毎日毎日を有難いと思つて感謝して居るなら或いは好んで事を起こす事になるかも知れない。しかしこの感謝祭を特に好んで事をなすと思うことは、毎日を有難く思つて居る人の考えとは受け取り難い。何



となくぐざりと思われる一年の端に立つて、過去を思い未来を希^{のぞ}むは是、事を好んで起^{これ}こす者の徒事^{ただごと}であろうか。僕にはそうは思われない。僕には最も純粹によき事と思われる。殊に有難く思う可き事を日常の多忙か或いは不注意か或いは温かならぬ心を有するがために忘れやしないかという恐れがある人等とその故に一晩の懇談をしたいというのが僕の願である。この願いをも、推して事を好むというならば、その人の心果たして感謝の念あつてなおこれを言うや否やを疑わざるを得ない。……感謝の心なき人は来らざるにしかずである。ただ来年の暮もその楽しみをなす機会の与えられん事を希^{ねが}うのであるが、その時までは本当に毎日毎日感謝す可き心のその人に与えられん事を希うのみである。雪を踏んで帰る。〔○〕ちゃんが見えた。彼も未だ未だ考えることを要する。求めんことを要する。

夜、石坂先生の債権総論終る。明日は債権各論に入る可く。夜1時半就床。

○1918年12月12日(木)

一日曇った日であつた。雪解けの道は悪い。快い靴の無い身には有難くない。但し夜に入つては月と星とは初冬の空に美わしく輝いている。

昨夜遅かつたので今朝起きたのは9時であつた。10時の時間にさえおくれた。Punklichkeit^{ピュンクトリックカイト}〔規律正しき事〕という事は、友人と何処かで特別に私的に会おうという事や、または汽車の時間に限られた事では無いぞという事を思わせられた。小野塚先生〔昨今の帝大総長〕の時間に昨日おくれた身がまた今日も遅れた。

今日で「国家存在の理由」が終つた。僕今までに国家存在の理由に関して三つの学説を聞いた。一つは上杉先生の道徳説である。一つは算先生の創設説である。一つは牧野先生の社会第一事実説である。而してここに第四説として小野塚先生の分析的説明である。小野塚先生は社会第一事実説に更に一步を加えたものを説かれる。先生御自身も是は充分の説明ではないけれども出来るだけは試みた結果である、その思潮の大体は Utilitarianism, Qualified Intellectualism〔功利説、限定主知主義〕であるといわれる。僕は未だ未だあきたらぬと思う。以上四説はそれぞれ憲法、行政法、刑法、政治学というものをむしろ前提として見た国家存在の理由である。少なくとも憲法、行政法、刑法、政治学の国家観である。凡ての根本、人間の人間としての国家観ではないように思われる。僕も近き将来に自らの国家観を立てたく思う。

〔神、この願いを聴き給わずして兄を取り去り給う。彼今天にて何を神より学びつつあるや?〕

麻布の帰りにおそらく○○〔嘉代〕ちゃんと思われる方の後姿を飯田橋で見た。……○○〔嘉代〕ちゃんの上に御恵深くくだれかし。○○〔桑原〕の家は世間並の精神的ならぬ家の如く想像される。世間並の物質的家族の中でも複雑な家と聞く。かの家にこの吾等の知れる



少女を送るは何となく惨しいような気がしないではないけれども、今となつてはただ彼の家の是に依つて清められ健やかに堅められん事を希うのみである。八尺さん〔現在の高木八尺氏、帝大法学部教授。博士論文「米国政治史序説」の名著あり。最近、法学博士となる。本年45才。さはれ、私は博士号に興味なきことを付言する〕、十拳君、盾ちゃん〔神田乃夫氏令息〕の心配とならぬ事をのみ祈る。……………

同じ時にまた武田のおば様と御一緒になった。おば様一日のお仕事をすましになつて愉快相に帰つていらつしやつた。ぬかる街と寒い風、飯田橋から大曲までお伴をする。

辰さんは此の頃大変に数学に熱心になつて来た。嬉しい事である。冬は英語と一緒にやりたいと思う。

〔冬にはクリスマスの頃から、“Little Lord Fauntleroy”「小公子」を兄は教えて下さつた。その本の初めの頁に次のように記してある。〕

To Tatsuo-san

With hearty joy and hope.

On my first Christmas, 1918.

Your brother

Masami

辰雄さんへ

心からの歡喜と希望を以て

私の初めてのクリスマス、1918年

君の兄

政美

“With hearty joy and hope”今、兄が天でこう叫んでいてくれるように思えてならない。

順子(のちの辰雄の妻)さん、この兄のこの喜びの言を特に憶えて下さい。1918年と云えば御身が7才、僕が14才の時でした。」

僕より美質なる青年はまた僕より有能ならざる筈はなく思われる。

〔兄のこの言は私に不当である。兄はどんなことがあつても私よりは優れている。〕

夜、内村先生が感謝を以てお送り下さつた「聖書之研究」12月号が届く。僕も感謝して封を解く。詩篇第1篇、第19篇の解釈がある。クリスマスには「子供の聖書」と「基督教問答」とを〔おば様〕にさしあげようと思う。その時これを貸してさしあげるのは〔注釈の役をつとめるから〕最有効に思われる。母様には僕の試験が終つてからである。今日は時間通りに寝る。

よき一夜を与え給え、凡ての人に幸ある一夜を与え給え、アーメン。

○1918年12月13日(金)

鼻がつまって寝られず、床に就いたのは、昨夜は一時半頃、お陰で今朝は八時頃目がさめた。氣持よき朝である。



初めて箕作元八博士の西洋史を聴く。吉野先生は箕作先生には一つの思想があるから、その講義も面白からうと云われた相である。その思想の何たるやはまだ解し難いけれども、理想と現実とに注意をなしつつ、他の辞を以て云えば、哲学と経済とに同じ重みを認めつつ、政治を合理的に解せんとせらるる点だけは明瞭である。そのメトード「方法」に於ては論理的なるが如くある。

今日は仏国革命、革命のあらねばならぬ所以を説かれた。三年前の吉野先生の見解と似て居るように思われる。やや異なれると思うのは三年前の講義は主に参政権という方面から、即ち「書」政の発達と云う方面からの研究であつたのにひきかえて今度は全く人間としてと云う感じがある。思想史と云うべきものであるかも知れない。

ナポレオンもビスマルクもさては今度のウイルヘルム二世も時代の思想には勝てないという事は二人とも同じく認められる所である。英雄の影は薄くなり、時代の色のみ明らかに出ようとする。……………

警曜社へ行つたが、「感想十年」〔内村先生の〕は当分出そうもない。困つたことである。

○1918年12月14日(土)

朝、目が醒めた時は薄ら寒い天気で、おやと思わぬことはなかった。しかし少しまごついた後で十時に図書館で十拳君に会つた頃には晴れ晴れした天気になつて居た。

今日も朝起きたのは遅かつたので財政を休む。聞けば十拳君も休んだ相だ。正ちゃんも怠けたのだから、怠者三人男の散歩であつた。

土手に出ると凡ては清いが冷たかつた。水は多かつた、どんなことを話しながら歩いたかは忘れてしまつたけれども、例によつて例の様な事を話して歩いたに相違ない。その中に正ちゃんの下駄の端緒が切れる。

土手に残っている雪は井ノ頭の景を想わしめるので行きたいと思つた。しかし道が悪いので、すげかえはしたもの下駄なる正ちゃんは、同行は思いあきらめなければならなかつた。何と云う神社か名は覚ええないが、畑の真中の神社から大宮へ戻る。神社の傍そばの藪やぶの中に休んで目に余る畑の緑と黒とを眺めた景色は忘れられない。藪の中の「我ら」自身達には判らないけれども、土手の向こうは風が激しいと見えて大きな竹の一並なみが濤なみかと見ゆる程ゆれ戦おのいていた。お宮から畑の中を大宮の森までの道はかつて資雄さん達〔同氏は僕の一級上に居た附属中学の生徒で、ある修学旅行の帰途奇禍のため非業の死を遂げた。思えば悲しき追憶哉!〕と一緒に井ノ頭まで歩いたあとである。ぼけが咲いて居た。一間程の小崖も思い出の種である。

ぬかる道を歩いて居る中に堤の下で徒然草の事を語つた続きがまた出て来る。語は源氏に移る。

「うたたねに恋しき人をみてしより夢てふものは頼みそめてき」



の上の句が判らなくて困った。歌の話は夏目さんの俳句論に移る。

「忘れしか知らぬ顔して畠打つ」

というのがある相だ。十拳君からは是を聞いたときは何とも思わなかったけれども、……しかし俳句というものは何だか世の中をなげやつてしまいうようにこの貴い生命を充分享受すると云う味のなく、つんとすました所が目立つので僕は嫌いだ。俳句党に言わせたら論ずるに足らずという事であろう。

大宮から堀ノ内まで何を話しながら歩いたか全然忘れてしまった。ただカントの事が出て来て例の

「見つめれば見つむるほど光をますもの二つあり、一つは天上の星にして、他は我が胸の中の道德律なり」

と云う事が話の題になつて居た事は覚えて居る。

〔正確な訳は、

「考えること屢々にしてまた長ければ長いほど、常に新たにして増し来る驚異と畏敬とを以て心を満たすものが二つある。そはわが上なる星辰の空とわが衷なる道德の律とである。」

“Zwei Dinge erfüllen das Gemüt mit immer neuer und zunehmender Bewunderung und Ehrfurcht, je öfter und anhaltender sich das Nachdenken damit beschäftigt: Der bestimte Himmel über mir und das moralische Gesetz in mir.” (Immanuel Kant)

堀ノ内で又あげまんの御厄介になる。今日は大曲と家とお土産を頼んだ。

万世橋に行き、十拳君と牛込で別れる。もう月と星とで初冬の天は美わしかった。

……僕は〔彼のために〕ああ、それが先生の真意であつたかと云う事を了解する事の可能を祈るのみである。……同時に山内先生にと云い出したのは僕であるから、こんど山内先生をさし措いて他に数学の先生をお頼みする事は僕には出来ない。……ただ、事実を事実と認めん事が誰にも出来たらと希うのみである。

あげまを〔武田の叔母さんへ〕お届けによつて思わずも長座をしてしまう。お湯と御飯を戴き、奥へ行つてお話を伺い、最後に帰つていらしたおじ様に松本先生の合併に関する御意見をおつたえして帰つたのは10時少し過ぎて居た。

○1918年12月15日(日)

未だ起きない中にもう龍ちゃんが帰つて来る。10月の半から会わなかった、数えれば2ヶ月になる。久し振りであつた。尾田先生から伝えられた恩賜^{おんし}一件の事などの話をする。……午後大関先生の追悼会を附属で開く。2時からと云うのに開かれたのは2時半頃であつた。山岳部、22回〔卒業生〕、15回、13回、職員の弔辞、田中先生の談で式了。式後斎藤先生の釧路での色々のお話あり。大関先生の追悼記を書こうと思つたけれども全くそれは失



敗であった。もう少し落ち着いてからにする外は無い。……お花、果物、弔辞をお届けして帰ると6時を過ぎて居た。

……「批判することは出来ても」よわき人間に対して弱き人間が之を責める事は決して出来ない。……自らは何の弁護士もなく、神の前に立たねばならない。……

故に責める事は、神の前に立ち得る能力のある人(信仰あつて、碎けた魂を以て神の前に立ち帰ることの出来る人)が神の前に立ちぬ時(神を離れて居る時)に於てのみ「可能」である。神の前に立ち得ない人は、いくら責めても駄目である。また神の前に「既に」立った人を責むるは責むる者の僭越である。……皮相な責任感をすてて、人間として神の前に申訳なき事をしたという所に於て潔く彼の罰と赦しとを希わねばならない。惟うに○○さんは恐らくここまで行っていないに相違ない。其処まで行つて貰うことを祈る外ない。……何とかして彼を神の前に立たしむる外はない。……彼の心が、せめて神をみとめずとも、道徳を解するまでにはなつて貰わなければならない。それには叱つた所で駄目である。教える外はない。……何と感謝するとも感謝するという点だけは同一と思つて悦んで来て下さる方は喜んで迎えよう。……鮭を担ぎ美しき夜の道を帰る。

○1918年12月16日(月)

………哲学の勉強に大いに便宜を得ることになった。………

○1918年12月17日(火)

今日も朝が遅い、民法のお休みを予期して本を買いに廻る。随分長い間望んで居た安倍さんの哲学史と波多野さん達のカントとがいよいよ僕の所有になるのかと思うと少々Bibliomania「蔵書癪」の傾向のある僕は実に嬉しい。神田と本郷とで欲う本も手に入った。図書館で実践理性批判の序を読む。序を読んでいるうちに早くカント彼自身につきたくなる。休みまで待つのがまだるっこい位である。完全に休みをこれ等の哲学書に使う代にはこれまでを完全に法律に使わなければならない。24日までに一通今学期の事を見ておきたいと思う。

今日は大曲おおまがり「の武田の叔母の家」で勉強する日である。二階は雪でも降りそうな空に開いて寒くある。但しおば様の御心は温かくある。温かい心に励まされて9時半頃まで頑張る。「第三者のためにする契約」まで済んだ。十四日の月を踏んで帰る。

………事の本性に対する批判を尊ばぬ人よ、……他人に本質を先見されてくやしう人よ、………よくも末の末をつかまえて一時の体面を維持したものである。……ペティティオ・プリンシピイ「ラテン語Petitio principii(= Fallacy of begging the question) 先決問題要求の虚偽」である。いつかは本質をしっかりと見得る様になる事を祈る。……御自分を開く緒が発見されるとするならば僕は甘んじて的まとを外れた所謂御心配を受ける。なさけなく



なつたと称し、甘い涙にさそわれて物を真面目に見ざる人よ、何時までもボンボンヤリヤリするが好い。もつとしつかり本質を見極めて行動する癖をおつけなさい。僕の一言片句で胸をどきつかせたり驚いたりする人には僕の真意は判ろう筈が無い。……………

○1918年12月18日(水)

今日は飛び起きたおかげで間に合った。……

虚偽の人達よ、何時かは本当の人間になって目覚めなさい。夜はよき月である。十五夜である。鳩山先生(の民法)の勉強終る。

〔以下25日まで25日にまとめて記したもの。各日の終りに「25記」とあるはその謂である

——編者——

又ずべった、眠い日が続いた証拠である。急いだ忙しい事のあったしるしと思え。スケジュール、

19日(木) 麻布

20日(金) 麻布、手紙

21日(土) お祝、銀座、大蔵省

22日(日) 鳩山先生、錦町

23日(月) 麻布、富井先生、山田先生、矢作先生

24日(火) クリスマス・イーブ、銀座、休

25日(水) クリスマス

○1918年12月19日(木)

フルンケル「おでき」は矢張渡辺には無理であった。今日はおじ様「青木の叔父様」が切り返して下さる。夜、大根は重かった。重い大根を担いで来たのはよかったけれども、家へ帰ってヨシ「女中の名」の気のきかないのに腹が立ち相であったのは醜態であった。

(*)「麻布」の帰りに武田のおば様と偶然電車の中で御一緒になる。働ける光荣と愉快とを感じ得る者は幸であると思う。

〔(*)「麻布」とは団琢磨氏の令息団勝磨君に英語及び数学を教えるため、足を運んでいたのである。同君は当時青山学院の生徒であった。水戸の高等学校の理科甲類に入学し、在校中優等、英語は級中の第一であった由。附属中学の入学試験を受けたとき、学科は一番であったのが体格で落ちたのであったが、その時の兄の同情も思い出される。ところが同君は、驚くなかれ、水高では100m、200mのSprinter(短距離走者)として有名であった。帝大、動物学科を修め、目下渡米研究中。将来有望なる動物学者である。〕

江戸川の辺、道は悪いけれども天上にはカントの所謂美しい星がある。我等の胸には神の笑が見える。幸と云わざるを得ない。(25記)



○1918年12月20日(金)

今日は予期に反して、お婆様〔武田〕にお目にかかる事が出来なかった。で少々寂しいような気さえして江戸川を歩こうとさえ思う。「散歩したあとで」一寸立ち寄って、長い間のお仕事の成就されて、(*)一人の乙女をお養い上げになったお悦びを述べる。尊き仕事を尊しと観じて尊く成就し得る人は誠に幸である。尊き仕事を自分の心から蔑ろにして、神の御意を知り得ず、毎日毎日をただ唯物的に暮らし、唯物的に見る外なき者は確かに不幸と言わざるを得ない。お婆様は正にその幸なる人の一人である。

〔*〕これを読んで、またここに書きうつしながら私は今、また、新町の御家庭のことを思う。そして同種の感謝と幸を新町のために感ずる。希望も亦新たである。幾星霜のお母様のお骨折と順子様の御勉勵との上に神の祝福豊かならんことを。過ぎにし一切をどうか神故に、み名の故に感謝して我々一同が憶えることを得ますように。順子さん、優しくお母様にお仕えになつて下さい。私のよろこびは限りないでしょう。私も、母によく仕えたくあります。我々は虚しき事に心をむけずに、楽しく暖かく老いたる母たちのために。」長い間、別に心配もせず、また待つているというほどは待ちもなかった大蔵省からの呼出が今日漸く来た。その由をも申し上げて帰る。今夜で重い大根漸く了る。 (25記)

〔沢庵漬にする大根を担いでは帰つて来た。よく思い出すことが出来る。—— 編者〕

○1918年12月21日(土)

フルンケルの治療をすましてから大蔵省へ行く。待つこと暫時、名も知らぬ大学生と一緒に黒田さんに引見される。取る〔採用する〕事に定めたから安心して勉強して下さいと云う事であつた。決定して見るとまた其処に一種の落着も出て来るものである。

土曜ではあるけれども、今夜の会のために早く帰らねばならないので、今日だけ散歩をしない事にする。その時間を睦ちゃんのために使う事と決心する。西片町へ行くとおみきちゃんも行くと言ふ。急に賑やかに四人で出かける。

丸善——明治屋——教文館——木村屋——亀屋。

十拳君にカントの「実践理性批判」を、勝磨さんに、“A Book of Golden Deeds”を買う。木村屋でパンを買い、ヴィエンナでお菓子を買ひ、うまい豆を買い、富ちゃん〔妹〕にもちや二、三を買う〔甥のため〕。よき買物であつた。睦ちゃんも喜んでゐた。ただ不遜なのは○○である。彼は妹方の神聖なる事と、大きな天命とを知らない。威張るのが兄の当然と思う古い時代を未だに脱し得ない。今日も一番先に疲れたのは彼であつた。労れて来てからの彼の不親切には恐るべきものがある。あれは僕にはもうとり得ない態度である。と同時に人にも休めてもらいたいと思う一つである。

重い荷物を両手にかかえて帰つて来るともうお婆様は来て下さった所であつた。朝から入った畳屋が未だすんだかすまぬかと云う所である。ちらかったお座敷をふき、机を並べ



などする中に、母様もお帰り下さった。

テーブル・クロス「机かけ」を使うと辰さんの机と僕の机とでよきディナー・テーブル「食卓」が出来上った。辰さんが掃除してくれた蘭と僕が見つけて来たアスパラガスとは好く相当した。美しき緑は純白に映えた。

段々お客様が見える。おじ様、三叔母様、弦、宣、是に家の四人、合計十人である。僕はいう。「今日も皆様おいで下さいまして誠に有難い事と存じます。僕は今年実に幸でありました。否、幸な年である事に気がつくようになりました。この気がつくようになりました事は実に有難い事と思います。

昨年の暮のくるしみ、1月の事、2月の事、3月の事、4月の事、5月の事、6月の事、7月の事、8月の事、9月の事、10月の事、11月の事、而して12月の事、思いつづければ、くるしい辛い一年でありました。と同時に彼「キリスト」はすべての苦味に甘味をつけ給いました。1月の事にも乃至12月の事にも、きつと甘味をお忘れになりませんでした。そしてその甘味に僕は少し見ぎめて来たのであります。実に幸であります。

しかし幸なのは僕一人とは思われません。皆様それぞれ幸でいらつしやると思います。ただどうかするとその御恵を忘れてしまう事があるのを残念に思うのであります。一年の暮は何となく一つの節が来たような気のする時であります。その節を利用して幸な方だけ御いでを戴きました訳でございました。

それ故においで下さった事は誠に有難く、若し今までの僕の言行は、(1)幸なものは僕一人と云うような一端でも表われました事がありますならば、それは僕の見聞の陋狭の故とお許を頂きとう存じます。どうも今夜は有難うございました。」

〔1〕兄が「幸」と云う一字の中に何を意味していたかを、本当に知る者は外の九人の中には一人も居なかつたであろう。けれども兄は人を信じ、理屈よりも愛を以て知らしめんとねがったのであろう。〕

やがて叔父様の御挨拶があつた。皆様喜んで下さった。おじ様が帰られたのは9時、皆様のお帰りは10時過ぎ、好き土曜の夕であつた。(25記)

〔註 この晩は永久に忘れられぬものの一つであつた。夢の国の、否、天国の絵のように、あの同心町の家の階下の座敷が眼前に浮かんできく。自分が何をしたかは憶えていない。けれども兄の親しげな様子と沁みこむような愛の心とは信仰なき私の心にも反映した。一面厳格であつたが、また一面優しかった兄の印象は私の最も内的なものに刻まれている。兄と僕とが幸のためにテーブルを作ったように、いつまでも天の兄と地の私とを神様が人々のために、福音のために、テーブル台となし給わんことを。この夕以後の日記を続けて書きしるすことは、今私のなすべきことでないと思う。ただかのフィレンツェの詩人の魂と心とを慕う人は、いつか、この後兄の語るところをきいて胸うつことであ

ろう。

これは兄が信仰に突入した最初のクリスマスを迎えんとして、近親に自分の感謝の心を表わしたく思い、日頃、家庭教師(今のアルバイト)をして貯蓄したお金でいろいろと晚餐のものを買い集めてふるまった夕のことである。併し兄の外一人の基督者もなきこの集いが兄にとってやはり辛いものであったことは、今察するに難くない。私は勿論入信前であったが、兄の美しい心には、そして入信後の兄の愛には既に感じていたから、兄の気持はその時も多少よめる様に思われた。——編者 辰雄」

○1918年12月24日(火)

学校は朝の民法で第一学期の幕をとじる。……夏の勉強を思う。……夏！ 夏！ 夏を思う。Wenn der Sommer kommt! というアルネの歌も思い出す。今年の戸隠につづいて昨年の片瀬を思う。憶い懐いてとどまる所を知らない。

〔兄は一高時代から、英文学の外のものにはレクラム版で親しんでいた。特に北欧のものやロシア文学が多かった。〕

明日から別の生活に入りたいと思う。……午後、長い間の約束とて辰さんと銀座へ行く。

……三越—丸善—教文館—明治屋—亀屋—覚醒社—丸善—パウリスタ—中西。辰さんには宿望の万年筆。A Book of Golden Deeds, Little Lord Fauntleroy〔小公子〕を買う。パウリスターでおいしいコーヒーとお菓子とを食べ、辰さんが「小公子」を読む様になった事を喜びつつ大満足で帰る。……静かな夜をChristmas Eveを感謝しつつ寝る。

〔中学の少年であった私にとり、このクリスマス・イーヴの散歩位楽しかった東京散歩の思い出はない。爾来三十余年も経つ今日でもその夢の様な楽しさが浮かんで、ほのぼのとコーヒーの香りまで漂うようだ。それよりも兄のアルバイトからにじみ出て来たその愛が何より貴く、過去の思い出は私にとって単なる過去ではないのである。〕

○1918年12月25日(水)

……この一年は厳粛な日が多かった。……来年もその翌年もかくありたい。……生命なる彼〔キリスト〕はこの日に人の世に來り給い又人の世に來り給わんとす。その日に凡ては成就され完成されるのである。……神は、生命〔キリストのこと〕は、僕を最も僕に必要な状態におき給う。僕はこの中に苦しみ、この中に育たねばならない。苦しむも育つも皆彼の御恵なるを思う時、とび立つ心は胸に踊る。……

散歩の道はぬかつて居たけれども静かな天地はクリスマスなる事を充分思わせてくれた。花はなくとも木は木である。梢は梢である。一本の幹一枝の梢にも彼の力と彼の愛とはあふるばかりである。思い見る、東京の雑踏と泥濘との中に債権者と債務者が巴字とあれ狂う時、静かに武蔵野の中央に立てば、天と地とは神の愛をそのまま受けて正に歡喜の



絶頂に達せざるを得ない。……

……デンマークを樞で救った彼のダルガス父子を思え。デンマークの荒野からヒースを追って、ノールウェイの大樞を育てるにはアルプスの小樞が必要であったのである。けれども大樞は終生小樞をその伴侶とする事が出来なかった。緑の野を変じて緑の林となすがためには又小樞をきり払わねばならなかった。小樞に成長を助けられつつ結局は小樞と離れなければならなかったのが大樞の性質であり運命であった。

僕はもともと苦しまねばならぬのではないかと思われる。もともと本当の幸、彼の御顔を毎日見得る境涯まで上られねばならなく思う。……God is love! (神は愛なり) 我が内心の大きな声であった。過去を思い、我が身を思う時、吾が最も信頼すべきは彼であった。彼のみは万事知り給い、万事執り成し給う。何事も彼の御意思のみ行わせ給え。

○1918年12月30日(月)

……大切な僕の聖書の第一頁には

「1917年12月30日 政美」

と書いてある。……丁度昨年の今月今日であったのである。一年の間にこれ丈の進歩が僕に於いて行われたという事は実にあり得ぬ深き御恵の一端である。……凡ての人よ、ありあまる溢るる恩寵に目覚めよ。人生永しと思う人はゲーテの *Leben ist kurz, Kunst ist lang*. (人生は短し、芸術は永し) に一顧をする要がある。芸術は永しという人はゲーテ共々、神の高き御座を仰ぐ要がある。彼は彼処にいまして又来り給わんとしつつある。……彼にありては「千年も一日の如し」である。マラーナサ、主よ来り給え アーメン。

一年の恩寵身にあまる。神よ、この声、この喜び、この感謝を尊き御子の御名に於いてききあげ給え。又来ん年をしてかくならしめ給え。神よ、この切なる願いを他の多くの願いと共に彼の尊き御名に於いて聞こし召し給え。アーメン。

○1918年12月31日(火)

……Vanity fair [「虚栄の市」] の住民は何時かその根底を失わざるを得ない。今失わんとつつあるが如くである。Dean Farrar : “The three Homes” [「三家庭」] を買う。長い間の宿望であつたこの本が手に入つたので実にうれしい。中学五年の第二学期に神田盾夫君から借りて——それも石川の紹介で——読んで、僕の「心」の一角を作られた事を思い出さずには居られない。

……夜母様仙台へお立ちになる。辰さんと僕と一緒に上野までお送りする。蓮玉で暮のおそばを食べる。……机に向かつて居ると夜は更けて行く。除夜の鐘が聞こえて来る。……遠ざかり行く1918年を感謝の声で送りつつ枕に就く。

